

瑠璃水晶と思はるゝ、  
飾りは濁る水の色。  
お、願はくは汝よ水、  
水蒸気となりて天上し、  
女神の袖に宿れかし。

○山の端に立て 根岸井上久子

思ひを詩になぞらへて、  
紙はひら／＼地に落ぬ、  
餘に拙きなうとみてか。  
元より詩には拙き身、  
月よ笑そ我胸の、  
春の日影にやすらふる、  
『風よいなみそ吾が願ひ、』  
鸚鵡返し響きのみ。

○鶯の歌

春をつかさの佐保姫が  
うす紫にたちこめて  
日かげ長閑けく風絶えて  
梅の花笠かつぎつゝ  
あかれさしそふあけほの、  
夕づゝにはふたそがれの

○卒業

才短くて物知らず、  
扉を開きて入る日より  
かくて四年の長き日を、  
園の守なる師の君の、

神の水にてありながら、

金樓の征矢の光線うけ、  
露ともなりて降りて来て、

君在す空にはなてども、  
さりとはうたて我詩の、

たゞ憧憬の筆の精、  
躍る思ひを秘してとて、  
可弱き胡蝶の袖なづる、  
云へども答へは山彦の、

岡山縣 百合子

みけしの裾か入重霞  
春の香高き大御空  
かげるふもゆる野邊ごとに  
うたふしらべは春の歌  
露にうたへばつゆは落ち  
花にうたへば花は散る

富山縣 瀧本秀子

くらきに迷ひし人の子の  
心の花も咲かせんと  
をしへの露の玉結び  
培ひそ、されむころに

いたはり育てしこれよりは、  
出てやこれより汝が世に、

○孝女

流れの音は絶ゆるとも、  
やまぬは賤やはたの音、  
破れ戸の隙を通ふかぜ、  
手足凍えんさむさにも、  
少女静かにかたり出ぬ、  
永き眠りの日なりけり、  
今宵は眠すきぬ織りて、  
供ふる燭のしるとせん、  
やみ居給へるち／＼上の、  
心からなるまことをば、  
言ひつゝ心動けまして、  
猿鳴く聲は牙え／＼とて、

○小さき花園

すがた幼き妹が、  
眺めをかしよう美はしき、  
早百合薔薇の香も高う、  
うす紅紫ゆる四邊には、

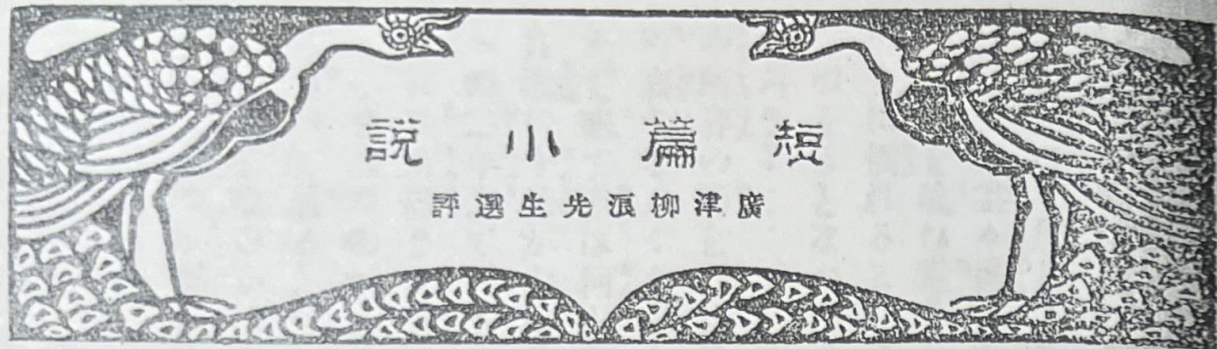
越前 新保勝子

朝夕へのいそしみに、  
花壇そこ／＼になれりける。

此樂園の扉を閉ぢ  
歸れや樂しきもとの家へ  
紀伊 春園 歌人

あゝ可愛げにともすれば、  
我からほこる妹が、

小さき花園の主人ぞと、  
罪なき聲に興ぞわく。



短編小説

評選生先浪柳津廣

一等 踊り子

岩 須賀川町 服部水仙子

停車場から運らねた車が、賑かな町に近づいて来る時は、さすがに懐かしい思はしたが、まだ六つの頑是なさ、幸は決して踊り子となり下つた自分の身を恥かしいものとは思はなかつた。見れば思ひ出す朧る氣な覺えを辿つては邊りキヨロ／＼見廻すので、後の師匠に「幸ちやん何だねえ」と笑はれたが、何となく道行く人の顔々が皆見たことあるやうな氣持ちがしてならなかつた。二年前相應に暮して居た水戸屋が天理教に迷つて、家屋敷、田畑田地まで残らず寄進してしまひ、一家は夜逃げ同様の姿で此地を去つたのは誰しも知つてゐるであらうが、今度の祭禮に、元町の屋臺に乗るべく買はれて来た子供役者の一座のうち、其末娘の幸が加はつて居ようとは誰しも思はないであらう。宿の内儀は名も知らぬ人も知らぬ、けれども顔だけは知つて居た。晝間も師匠に是々と身の上を聞いて、驚いた顔をしたつげがそれからは幸のことを一番能く世話して呉れる。無邪氣な、人懐かしい其性は誰にも可愛がられるのだ。夕餉にと連れて歸られた子等もまた段々と集つて来て、灯と花に裝飾られた屋臺に太鼓の音賑はしく、家毎の軒にさした紙花、日の丸の提灯、軒下に並ぶ諸々の店からカンテラの煙り流れて、ゴム風船に飛ばれて慌てる者、梨一つに寄つてたかる吹屋の店、僅か一錢のお慰みの文廻しに見惚れて背の子を泣かす子守やらの如露の水に飛び退いてはまた女子の寄つて来る酸漿屋、賑はしとよりは寧ろ騒々しい町内の有様を二階から眺めて居ると「幸ちやんさあ／＼お仕度だよ」欄干に手をかけた儘振向くとお白粉の刷毛を持つてお師匠がお手招をする。素直に其前に座つて白粉をつけて貰ふ。鼻の先を一段と濃くしながら「今夜は笠揃へて二幕だけだから確り遣るんだよ、よ千松」と一寸其顔をつゝいて「さあ出来た、其着物を脱いで今夜の出し物は御殿政岡。元の字の



はいつた揃への裕衣を脱ぎ乍ら幸は千松の臺辭を口の内に繰り返して居ると「幸ちやん舞臺に出て居眠りするんぢやないか」すると皆がどつと笑ふ。憎しい聲の起元はと見れば、嫌ひの嫌ひの喉と云ふ、年は十六の一座で一番の意地悪。髪をつけた其顔を見ると此人が八汐に扮るのだ。たとひ芝居にもせよ、此八汐に殺されるのかと思ふと何となく嫌な氣持ちが爲る。鏡と睨みくらの面々も皆衣装の着付けにはじまつた。馬鹿隣りの音が近くなつて來たのでつと首を出して見ると隣り町の花車が此町内にはいつて來たのだ。屋臺の前には早や幕開きを待つ人の



頭が黒く近い家の二階には人の顔がぞつくりと並んで居る。ふと下を見ると通る人が皆上を見上げて居るのですがに首を引込めてしまつた。拍子木の音の一つ／＼に動揺めいてゐた人聲は靜になつた。後見送つて政岡が、まさなきことも身にかゝる。床より起る三味の音に連れて紅白だんだら染めの引幕はあけられた。幾百の人の目を身に引き受け乍ら、袴の下に手を置いて、赤く揃ふた人の顔を徐ろに見渡すのも場馴れたればこそ。此中には昔遊んだ友達も交つて居るであらう。ふと幸は昔住んだ自分の家が今どんなになつて居るであらうと考へた。向ふの家のかげから頭ばかり見える半鐘

を五六軒越したところが幸の家であつた。店は魚を商ふて居たのであつたが、今は誰が持家となつて、誰が何を商つて居るであらうか。

義太夫は益々進んで榮御前のお入りとなり、千松は工の菓子を食べ散らして残酷な八汐の刃にかゝつて舞臺の上に倒れることになつた。観客は水を打つたやうにひつそりとなつた。寝ながらに幸は何を考へてゐるであらう？：：：そなたの命は出羽奥州五十四郡の一家中所存の臍を固めさす誠に國の礎ぞやとは云ふものゝ可哀やな：：：張りつめて居た氣も憊うなつてはゆるんで來て幸は何となく眠氣を催して來た。：：：諷ふた歌に千松が七つ八つから金山へ一年待てどもまだ見へぬ二年待てどもまだ見えぬ：：：あたゝかい母の背中に小守歌さく昔にかへつて幸は全く舞臺の上に睡つてしまつたのである。幸といふ名を與へながら如何に貧困つて居るとはいへ恐ろしい人中に子を賣つた親を怨みもしないかはりに、師匠夫婦が僅かの愛の影に世の荒浪知らぬ幸が夢は、そも何の上を辿つて居るであらうか。

材料と云ひ、筆つきと云ひ、殆んど隙が無い、六つの子供にしては、少しませ過ぎて居る處もあるが、七ツ八ツから金山への歌を聞きながら、賣られたる千松が、うと／＼と幼き夢を辿るあたりは蓋し歴

巻の好文字、作者の文情は誰に私淑すると云ふ事もなく、自然に露展して來たもので、悠揚たる裡に詩趣が溢れて居る(選者評)

三 等 ○可憐の義妹

埼玉縣大里 中村紫香子

「只今」出迎た下女に答へて奥に行くと「あの故郷から美枝子様といふ方が入しやいました」と云つて「マアどうしてとせう」と不審しくも嬉しく伯父伯母に會釋もそこ／＼二階の自分の居間の障子開ると美枝様は雑誌を机の上に載て座を直して居る所「まあ美枝様、どうして：：：」とあまり懐しさに何より早くこゝろ云て膝突合せて座ると「姉様、お懐しう御座いますわ」ともう愛らしの眼から涙が溢れる。「まあよくね」と私は外の言葉はてない。お茶菓子は一杯盛つた儘で、お茶は冷切つて火鉢の灰は眞白に消えながれてる。美枝様は私の隣村で年は私より三つ下で十四。繼母の手で辛く育てられた子なのだ。私は大層可憐そうてならないので毎も慰の言葉を與へる。だから美枝様は私を姉様々と慕ふて學校の授業終つて一度は必と暇を盗んで私に逢に來ののだ。だのに私は去る四月今入學する學校の三年に上つたので美枝様も私の跡追ふて一年